

# 環境を活かした造形活動に関する考察 ～地域と関わるものづくり教育活動の在り方について～

樋口一成\* 西村志磨\*\* 藤田雅也\*\*\*

\*美術教育講座

\*\*一宮女子短期大学

\*\*\*名古屋経済大学短期大学部

## A Study of Craft Activities Developed from the Environment ～ An Ideal Method of Educational Craft Activity and the Local Community ～

Kazunari HIGUCHI\*, Shima NISHIMURA\*\* and Masaya FUJITA\*\*\*

\*Department of Fine Arts Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

\*\*Ichinomiya Women's Junior College, Ichinomiya 491-0938, Japan

\*\*\*Nagoya Keizai University, Junior College Division, Kasugai 484-8503, Japan

### 1 はじめに

私たちを取り巻く環境は、自然環境、社会環境、家庭環境など実に多様な捉え方ができる。近年は特に、環境問題等の影響から自然環境の視点がクローズアップされているが、それ以外の社会環境や家庭環境も私たちにとって大きな影響を与えていることは言うまでもない。特に、社会環境や家庭環境に関わる地域社会は、少子化、核家族化、都市化、人間関係の希薄化等により大きく変化し、それらによる地域や家庭の教育力の低下が指摘されている。そして、そのような変化に伴い、地域との関わりの中で育まれる愛郷心や、地域の文化や習慣を知る機会が急激に減少してきていることが懸念される。

このような現状の中、文部科学省では地域教育力の再生をめざし、地域に根ざした多様な活動の機会を提供する事業「地域教育力再生プラン」を実施した<sup>1)</sup>。また、学校教育の現場においても、「社会教育関係団体等の各種団体との連携、地域の教材や学習環境の積極的な活用などについて工夫すること」<sup>2)</sup>とし、地域と連携を図りながら、子どもたちに体験的な学習の機会を与えるような取り組みがなされている。

本稿では、このような私たちを取り巻く地域社会の現状を踏まえ、筆者らが関わってきた活動を通して、地域とものづくり教育活動の在り方について探り、ものづくり教育がいかにして地域と関わるべきなのかを

検討したい。

### 2 地域と関わるものづくり教育活動の実際

地域とものづくり教育活動を結びつける媒体の一つとして、近年頻繁に行われるようになった「ワークショップ」という活動が挙げられる。日本で、この「ワークショップ」という言葉が使われるようになったのは1980年代頃からで、主に体験型の講座を指すことが多い。その内容は、実に多種多様であり、ワークショップ企画プロデューサーの中野民夫氏はアート系、まちづくり系、社会変革系、自然・環境系、教育・学習系、精神世界系、統合系<sup>3)</sup>に分類できると述べている。さらに、このワークショップに関して中野氏は「私たちの社会の行き詰まりを打開する、ひとつの希望の道」であり「現代の課題である『持続可能な社会』を創る」<sup>4)</sup> ヒントを内在するものであると述べている。現代の私たちを取り囲む社会環境・地域環境は、合理化、個人化、情報化が進み、それによるある種の閉塞感のようなものを内包している。そして、これらを打開する一つの方法として、このワークショップが近年になり必然的にそして急速に様々な分野で普及してきたと考えられる。

また、前記した文部科学省の「地域教育力再生プラン」でも、核家族化や少子化から派生する社会的な閉塞感を、地域という土壌を用いて人と人が交流しあう

機会を設けることで打破しようと試みている。特に、「地域子ども教室推進事業」では、平成16年から18年の間を緊急3ヵ年計画として、市町村などの行政、学校、家庭、地域社会や企業などの地域の大人たちの教育力を集結して子ども達の放課後や週末における様々な体験活動や地域住民との交流活動等を支援している<sup>5)</sup>。その具体的な内容としては、子どもたちが昔ながらの遊びを楽しんだり、文化活動に取り組んだり、スポーツをしたり、ものづくり活動に取り組んだりするなどが挙げられ、様々な体験型の講座が展開されている。筆者らはこれまでに、行政やNPOなどの各機関から依頼を受け、多様な内容のものづくり体験型のワークショップを行ってきているが、いずれも地域社会との関わりの中でこれらを展開してきた。その中でも特に地域との関わりを通して進めてきた3つの実践を次に取り上げ、それらを分析することにより今後の地域とものづくり教育活動の在り方を検討していきたい。

### 2-1 刈谷市南部生涯学習センターでの「ものづくり体験講座」における取り組み

愛知教育大学美術教育講座工芸研究室には、1997年頃より、学校・教育委員会・企業・NPOなどの各機関から子どもたちがものづくりを体験できるようなワークショップの実施依頼が入るようになってきた。現在も多くの機関から依頼があり、特に工芸研究室所属の大学3・4年生が中心となって、学外にて多くのワークショップを実施している。

工芸研究室にもものづくり体験型のワークショップの実施依頼が入るようになってきた要因としては、次のような点が考えられる。①主に小中学校での図画工作や美術の授業時間が減り、子どもたちがものづくりを体験する時間が激減していること。②子どもたちがものづくりを体験する時間が激減している実態に対して、保護者、地域、企業などが問題視していること。③子どもたちがものづくりを体験する時間が激減している状況を少しでも改善する取り組みとして、地域での活動を重視している人々、企業、NPOが増えてきたこと。④生涯学習センターなど地域にある公共の機関において、子どもたちがものづくりを体験できる場を確保する取り組みが増えていること。⑤工芸研究室の大学生や教員が中心となって行っている学外でのワークショップの情報が、徐々にいろいろな機関に伝わってきていること。

一方、工芸研究室では、次のような観点から、積極的に各機関からの依頼に応じている。①大学における授業科目や授業時数削減に伴う弊害を少しでも減らすこと。②大学生にとって実践的な指導力や教育力を養う場を確保すること。③将来教員になることを目指している大学生が、多くの子どもたちと触れ合うことによって、子どもたちの考え方や行動などを知り、子



写真1：  
草木と泥でハンカチとくつ下を染めよう！



写真2：  
木のマグネットをつくろう！



写真3：  
草木染めでうちわをつくろう！



写真4：  
水引でつくる飾りつきカラフルなペン立て



写真5：  
いろいろな木の色を活かしてつくるキーホルダー



写真6：  
紙糸でつくる自分だけのクリスマスツリー

(※写真1～6は、2007年度実施の講座のもの)

表1 刈谷市南部生涯学習センターにおけるものづくり体験講座の内容(2001.10.～2008.7.)

〈刈谷市南部生涯学習センターでのものづくり体験講座(小学生対象)の内容と参加人数〉

■2001年度

2001年10月14日(日)	「木でつくろう!～くねくね人形づくり～」	大学生6名 小学生24名
2001年11月4日(日)	「木でつくろう!～いろいろなおもちゃづくり～くねくね人形1」	大学生5名 小学生3名
2001年11月25日(日)	「木でつくろう!～いろいろなおもちゃづくり～くねくね人形2」	大学生5名 小学生5名
2001年12月2日(日)	「木でつくろう!～いろいろなおもちゃづくり～竹を切る」	大学生5名 小学生4名
2001年12月16日(日)	「割り箸でつくろう!～割り箸でっぽうづくり～」	大学生8名 小学生22名
2001年12月23日(日)	「木でつくろう!～いろいろなおもちゃづくり～凧」	大学生7名 小学生4名
2002年1月13日(日)	「木でつくろう!～いろいろなおもちゃづくり～竹トンボ」	大学生7名 小学生4名
2002年2月3日(日)	「木でつくろう!～いろいろなおもちゃづくり～けん玉」	大学生6名 小学生3名

■2002年度

2002年7月27日(土)	「ガラスでつくる～キラキラ・キーホルダー～」	大学生7名 小学生11名
2002年8月3日(土)	「糸でつくろう～手作り布～」	大学生4名 小学生11名
2002年8月11日(土)	「ハンカチを染めよう～手づくりハンカチ～」	大学生5名 小学生15名
2002年10月12日(土)	「紙粘土でつくろう～ぼくらのおともだち～」	大学生6名 小学生11名
2002年10月19日(土)	「コルクボードとバルサ材でつくろう～写真フレーム・パズル～」	大学生4名 小学生4名
2002年11月16日(土)	「和紙を染めよう～折り染めの世界～」	大学生5名 小学生4名

■2003年度

2003年8月2日(土)	「和紙でつくる～ランプシェード～」	大学生4名 小学生21名
2003年8月9日(土)	「ガラスでつくる～キラキラ・キーホルダー～」	大学生4名 小学生11名
2003年8月23日(土)	「バルサ材でつくる～パズル～」	大学生3名 小学生21名
2003年11月15日(土)	「ゆらゆら・ゆれる～モビールづくり～」	大学生4名 小学生15名
2003年11月22日(土)	「あき缶でつくる～歩くロボット～」	大学生4名 小学生4名
2003年11月29日(土)	「フェルトでつくる～オリジナル・ポシェット～」	大学生4名 小学生15名

■2004年度

2004年7月31日(土)	「土で作る夏休み絵日記(陶版画)」	大学生3名 小学生16名
2004年8月21日(土)	「身近な材料で万華鏡をつくろう!」	大学生4名 小学生17名
2004年11月27日(土)	「身近なものを使って玉ねぎ染めをしよう!」	大学生3名 小学生2名
2004年12月4日(土)	「フェルトでコースターをつくろう!」	大学生3名 小学生6名
2004年12月11日(土)	「ゆらゆらゆれるモビールをつくろう!」	大学生3名 小学生5名

■2005年度

2005年7月23日(土)	「木でおもちゃをつくろう!」	大学生3名 小学生22名
2005年7月30日(土)	「金属で飾りをつくろう!」	大学生3名 小学生24名
2005年8月6日(土)	「粘土で動物をつくろう!」	大学生9名 小学生22名
2005年12月3日(土)	「ガラスでつくろう!～X'masのかざりⅠ～」	大学生5名 小学生11名
2005年12月10日(土)	「ガラスでつくろう!～X'masのかざりⅡ～」	大学生5名 小学生11名
2005年12月17日(土)	「ガラスでつくろう!～X'masのかざりⅢ～」	大学生5名 小学生11名

■2006年度

2006年7月15日(土)	「和紙の紐でつくるランプシェード」	大学生4名 小学生16名
2006年7月22日(土)	「パルプと針金でつくる飾り」	大学生3名 小学生17名
2006年8月5日(土)	「いろいろな色の砂を使って絵をつくろう」	大学生5名 小学生5名
2006年12月2日(土)	「雪の日のモビール」	大学生5名 小学生21名
2006年12月9日(土)	「レース模様の小物入れ」	大学生9名 小学生15名
2006年12月16日(土)	「ホワイトクリスマスツリー」	大学生6名 小学生2名

■2007年度

2007年7月14日(土)	「草木と泥でハンカチとくつ下を染めよう!」	大学生5名 小学生2名
2007年7月21日(土)	「木のマグネットをつくろう!」	大学生5名 小学生19名
2007年7月28日(土)	「草木染めでうちわをつくろう!」	大学生7名 小学生13名
2007年12月1日(土)	「水引でつくる飾りつきカラフルなペン立て」	大学生4名 小学生3名
2007年12月8日(土)	「いろいろな木の色を活かしてつくるキーホルダー」	大学生4名 小学生19名
2007年12月15日(土)	「紙糸でつくる自分だけのクリスマスツリー」	大学生4名 小学生18名 幼児3名

■2008年度

2008年6月15日(日)	「クラフトパンチを使ってオリジナルカードをつくろう!」	大学生4名 小学生16名
2008年6月22日(日)	「牛乳パックでいろいろな形の紙をつくろう!」	大学生5名 小学生15名
2008年7月6日(日)	「フェルトでコースターをつくろう!」	大学生4名 小学生9名

※2007年12月15日のみ、地域の子ども会からの依頼を受けての活動

もたちの真の姿を理解することができるような場を確保すること。

このように、各機関からの依頼による多くのワークショップに、研究室として取り組んできているが、ここでは、刈谷市と刈谷市教育委員会からの依頼を受けて、2001年度から現在に至るまで取り組んでいる刈谷市南部生涯学習センターでのものづくり体験講座について考察してみたい。

この講座は、刈谷市在住の小学生を対象としたものづくり体験型のワークショップで、刈谷市の広報を通じて参加者を募集し、年間6回程度の講座を実施している。この活動では、主に毎年、工芸研究室所属の大学院生や大学4年生が、自らの修了研究や卒業研究の内容を子どもたち対象のワークショップに関連付けるといったかたちで内容を検討し実施している。例えば、染織を研究している学生は子どもたちにもできる染めの内容を、木工を研究している学生は子どもたちにもできる木工の内容を考えて実施している。これらの活動は、従来からある教育実習とは異なり、学生自身の思いや考えを比較的そのままの形でワークショップの内容に盛り込むことができるようになってきている。つまり、大学院生や大学生自身がワークショップの中で子どもたちに実践してみたい内容を実際に行い、実験的な取り組みを行うことができるようになってきている。この学生自らが取り組んでみたい内容を子どもたちに教育できること、さらに実験的な取り組みを行うことができるという点で、将来教員となることを希望している学生たちにとっては、実践力とともに企画力を養うことのできるとても貴重な場となっている。この活動では、大学1・2年時から参加する学生や複数回参加する学生など、積極的な学生たちの参加が多いことも特徴としてあげられる。刈谷市南部生涯学習センターで実践されたものづくり体験講座の活動風景を写真1～6に、これまでの活動の内容等を表1に示した。

この刈谷市南部生涯学習センターでのものづくり体験型ワークショップでは、刈谷市や刈谷市教育委員会という公共機関と大学の研究室とが連携しながら過去7年間に亘って地域の教育活動に取り組んできた。その中では、公共機関においては、地域の大学にある教育力を活用でき、生涯学習センターの教育活動を安定的に運営することができた。また大学の研究室においては、大学生にとって貴重な教育経験の場を確保でき、大学生の実践的な指導力・教育力や企画力を育成することができた。さらにワークショップに参加した子どもたちにとっては、地域の教育力を活用でき、多くのものづくりを学ぶ機会を得ることができた。このように公共機関と大学の研究室とが連携してワークショップを実施してきたことには大きな意義があるが、一方で、子どもたち一人ひとりにとっては参加形

態やものづくり体験が単発的であること、また活動全体を通じた検証が難しいことなど、今後改善していくべき課題は多い。今後は、公共機関と大学の研究室との連携を深めていくとともに、子どもたちにとって必要な教育内容をさらに検討し、実践していくことが望まれる。

## 2-2 津島・まちあそびでの「mono・モノ・ものづくり」における取り組み

### 2-2-1 津島・まちあそびとは

「信長の台所 津島・まちあそび」は、NPO法人まちづくり津島、尾張津島藤まつり実行委員会、津島市観光協会、天王文化塾、津島市ライオンズクラブなどの団体が主催となり、愛知県津島市において2004年より行われている地域活性化事業である。「津島の歴史文化を町の魅力として情報発信するとともに、楽しいまちなか空間を創り出すことによって、市民・観光客が、催事を通して津島文化に触れることができ、町の良さを体感してもらう」という目的のもと、①地域コミュニティの再生、②まちなかの活性化、③津島の歴史文化の発信、④市民参画のまちづくり推進を主なねらいとしている<sup>6)</sup>。

筆者は、NPO法人まちづくり津島の依頼により、2006年5月と2007年5月に、ものづくり教育会議<sup>7)</sup>による、ものづくり体験教室及び会員による作品展示「mono・モノ・ものづくり」を実施し、イベントに訪れる人々を対象としたものづくり体験型ワークショップや作品展示を行った。前記した依頼者側の目的のもと「mono・モノ・ものづくり」では、まちあそびの参加者が津島の町を巡る短時間の間に気軽に参加でき、さらに様々な年齢層の人たちが楽しんでものづくりに取り組めるような活動の企画・運営を実践してきた。

次に、この活動に関する概要とアンケート結果等を記す。

### 2-2-2 「mono・モノ・ものづくり」における取り組み

2006年のまちあそびでは、「大型連休期間中の藤まつりに訪れた人々を津島の中心市街地・まちなかに誘引し、活性化を図るために、市民主体の様々な催事を行い、楽しい町なか空間を創り出す」という目的のもと、約20～30の団体がこの企画運営に関わった。2007年は、「津島のまちなかを舞台にして、住民・観光客が憩い楽しむ空間を創造する」というテーマに沿って催事が実施された。また、催事の内容を「知る」「作る」「味わう」「聴く」「観る」「買う」「巡る」の7分野とし、①集客力のある催事、②津島の歴史文化を発信する催事、③市民の手作り催事の展開、④市民参加催事の充実、⑤「創る・作る・造る」分野の催事創造、⑥「味わう」分野の拡大、⑦社会奉仕団体との協働態勢づくり<sup>8)</sup>を行うという目標の下で、まちあそびが行われ

た。

これらの目標から「mono・モノ・ものづくり」では、訪れた人が気軽に参加し、短時間でものづくりを楽しむことができ、訪れた人々の思い出づくりの場としての活動の展開を心掛けた。

2006年、2007年の「mono・モノ・ものづくり」におけるワークショップの概要を表2と表3に、制作物および活動風景を写真7～13に、参加者に対するアンケートの調査結果を表4と表5に示した。なお、アンケートの調査項目は「年齢・学年」「ものづくり体験教室の種別」「参加後の感想」「ものづくり体験教室を何で知ったか」「その他意見・感想」「今後やってみたいものづくり活動について」である。

表2と表3の通り、「mono・モノ・ものづくり」では2006年・2007年とも3つの異なる内容のワークショップを日替わりで実施した。参加者は、近隣の住民が多かったが、中には藤まつりに合わせ、北海道など遠方から来た人たちも見られた。また、来場者は6歳～60歳代と幅広い年齢の人々が参加したが、アンケート結果からは年齢の幅に関わらず、多くの参加者が活動を楽しめたことが理解できた。特に、写真12のように親子での参加者も見られ、表4-1-(7)「娘と一緒に出来て楽しかった」という意見からも、この活動自体が親子・家族の交流を図る良い機会になっていたことが理解できた。そして、表4-1-(3)「久しぶりに工作をすることができて大変楽しかった」や表5-3-(5)「つくる機会がなかなかないのでとてもおもしろい」、(7)「貴重な体験になった」などの意見からは、普段はものづくりを行う機会が少ない大人にとっても、ものづくりの楽しさを再発見する機会に

表2

実施日	2006年5月5日(金)・6日(土)・7日(日) 10:00～16:00
制作物と参加人数(実践者)	5月5日「キャンディー・ガラスのストラップ」(写真7) 12名 5月6日「消しゴム版画」(写真8) 9名 5月7日「オリジナル万華鏡」(写真9) 6名
場 所	愛知県津島市本町 野田家
その他	(材料費) 5月5日・・・600円 5月6日・7日・・・500円

表3

実施日	2007年5月3日(木)・4日(金)・5日(土) 10:00～16:00
制作物と参加人数(実践者)	5月3日「消しゴム版画」(写真8) 6名 5月4日「パーチメントクラフト」(写真10) 9名 5月5日「コーヒー・紅茶の濃淡染め」(写真11) 2名
場 所	愛知県津島市本町 三養荘
その他	(材料費) 各500円

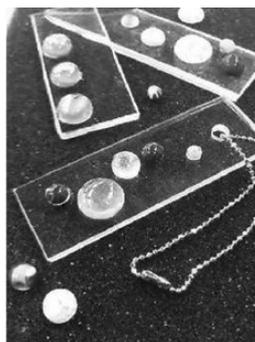


写真7：  
キャンディー・ガラスの  
ストラップ



写真8：  
消しゴム版画



写真9：  
オリジナル万華鏡

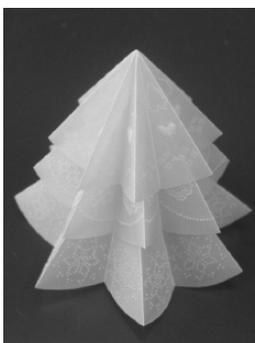


写真10：  
パーチメントクラフト



写真11：  
コーヒー・紅茶の濃淡  
染め



写真12：  
制作風景(消しゴム版画)



写真13：  
制作風景（濃淡染め）

表4 2006年アンケート調査結果

<アンケート回答者数 14名>

- 1、参加後の感想
  - (1)短時間でできて楽しめた(キャンディーガラス・50代)
  - (2)かわいい作品が出来楽しかった(キャンディーガラス・60代)
  - (3)久しぶりに工作をすることができて大変楽しかった(消しゴム版画・20代)
  - (4)使う楽しみもできてよかった(消しゴム版画・20代)
  - (5)面白かった(消しゴム版画・小3)
  - (6)思いがけないほどの出来栄えで嬉しかった(消しゴム版画・50代)
  - (7)娘と一緒に出来て楽しかった(万華鏡・30代)
  - (8)万華鏡が好きなので参加しようと思った(万華鏡・小1)
- 2、ものづくり体験教室を何で知ったか？
  - (1)通りがかりで見つけた(5名)
  - (2)関係者の紹介(3名)
  - (3)知人、参加者の紹介(4名) (4)その他(2名)
- 3、今後やってみたいものづくり活動
  - (1)竹とんぼ (2)こま (3)プラバン (4)七輪焼き (5)陶芸 (6)髪飾り

\* 1の( )内は参加した講座名と年齢を、2の( )内は回答数を記載

表5 2007年アンケート調査結果

<アンケート回答者数 10名>

- 1、参加後の感想
  - (1)いろいろな模様を工夫してつくれるのが楽しかった(パーチメントクラフト・20代)
  - (2)ぱちぱちするのが楽しかった(パーチメントクラフト・小6)
  - (3)日頃できないことが出来貴重な経験になった(パーチメントクラフト・20代)
  - (4)初めてやったのでとても興味深く感じた(パーチメントクラフト・20代)
  - (5)いろいろと教えてもらいながら作れたのがよかった(濃淡染め・50代)
  - (6)とても楽しかったので来年も参加したい(消しゴム版画・濃淡染め・50代)
- 2、ものづくり体験教室を何で知ったか？
  - (1)まちあそびのパンフレット(1名) (2)関係者の紹介(6名) (3)知人、参加者の紹介(1名) (4)その他(2名)
- 3、その他意見・感想
  - (1)家でもやってみたい (2)来年も参加したい (3)またやってみたい
  - (4)自分のペースで進められてよかった
  - (5)つくる機会がなかなかないのでとてもおもしろい
  - (6)のんびりした空間で満足いくまでつくることができよかった
  - (7)貴重な体験になった
- 4、今後やってみたいものづくり活動
  - (1)思い出に残るものなら何でも

\* 1の( )内は参加した講座名と年齢を、2の( )内は回答数を記載

なったことが理解できる。さらに、表5-3-(6)「のんびりした空間で満足いくまでつくることができよかった」という意見から参加者は、古民家という普段の生活空間とは異なる空間でひと時を過ごすことで、ゆったりとした時の流れを体感していたのではないかと思われる。津島市中心部には古民家が数多く現存し、まちあそびのイベントの多くがこの古民家を利用して行われた。そして、訪れた人々のほとんどが、この建物や庭のつくりに興味を示していたことから、ゆったりとした雰囲気の中で心地よくものづくりを体験することができ、それとともに、このワークショップが環境としての地域や文化財を味わうきっかけにもなったのではないかと考えられる。

一方、広報活動については、ものづくり体験教室を知った理由の多くは友人の紹介や通りがかりであり、パンフレットで知ったという参加者は1名のみであった(表4-2, 表5-2)。また参加者や訪れた方々からは、「もっと事前に、具体的にどのようなものづくりをするのかという内容をパンフレットで知らせてほしい」という意見が数件あった。参加する側にとって「ものづくり体験教室」という催事内容だけでは活動を十分に理解できず、興味はあってもあいまいな情報のため、参加を断念するというケースも考えられる。今後は、できる限り詳細な内容をパンフレットに記載できるよう、早期に主催者側との連携をとるとともに多くの人々に活動を知ってもらえるような広報活動を行う必要があるという改善点が挙げられた。

また、主催者側の実施目的と活動の整合性については、前述した「まちなかの活性化」という面においてこのものづくり体験型ワークショップは、企画の一助となっていると考えられるが、「地域コミュニティの再生」、「津島の歴史文化の発信」、「市民参画のまちづくり推進」という点に関しては、主催者側と具体的な話し合いを行いながら今後の在り方を検討していく必要があると考えられる。さらに、その場で終わってしまう一過性のものでなく、地域と連携を図りながらワークショップを推進し、展開していくことも今後の課題であると考えられる。

以上、2回にわたる「mono・モノ・ものづくり」の実践から、このような地域活性化イベントの一環として実施されるものづくり体験型ワークショップにより、ものづくりを通じた親子・家族の交流の場、地域の人々が地域に残るものや空間の良さを再発見する場、ものづくりの楽しさを再認識する場、異年齢の人々が交流できる場を提供できたと考えられる。今後は、これらの内容をさらに検討し、主催者側との連携を深めていくとともに活動の質を高めていくことが必要である。

### 2-3 中学生による壁画制作活動の取り組み

子どもたちが時間的・空間的な制約にとらわれず、伸び伸びと表現活動を行い、多くの人に作品を認めてもらう機会を持つために、地域社会に開かれた美術教育の必要性を強く感じている。その具体的な取り組みのひとつに本実践が含まれる。

東郷町立東郷中学校では、平成18年度より中学生が主体となって、行政機関や地域住民と連携をしながら「境川緑地壁画制作活動」に取り組んでいる。本校から1 km ほど南に位置する東郷町春木の境川河川敷には、堤防の斜面に縦3.5メートル、横15メートルの巨大なコンクリート壁面が10カ所ある。この壁面には、約25年前に東郷町が町内の小中学校の児童生徒から募集した原画をもとに、町が依頼した業者によって壁画が描かれた。しかしながら、現在は約25年の年月を経て壁面は風化し、はっきりと絵柄が見られない状態になっている。このような現状の中、町役場では、壁画の修復もしくは壁面の撤去が検討されていた。そこで、筆者は壁画の修復を業者に依頼するのではなく、地元の中学生に描かせてはもらえないものだろうかという発想を持ちかけ、この壁画制作活動は始まった。

平成18年度は「夢と希望」、平成19年度は「響きあう心」をテーマに、生徒がアイデアを出し合って原画を決定した。生徒は、たくさんの人に見てもらえる場所に壁画を描く喜びと同時に使命感を抱くようになり、事前に何度も現地へ下見に行き、話し合いを重ねた。この壁画制作活動を通して、東郷町のよさをアピールしたいという思いから、町の花のアヤメや町で盛んなスポーツのボートをデザインに取り入れ、子どもからお年寄りまでが笑顔で楽しく過ごしている様子を表現した(写真14~17)。

今回のように規模の大きな作品を制作することは生徒にとっては初めての経験であり、普段の教室の中で行っている授業とは違った良さや楽しさが含まれている。そのひとつには、活動を通して地域住民と関わる機会が持てることが挙げられる。河川敷を散歩する地域住民も多く、そこでのコミュニケーションを通して、生徒は自分たちの取り組みが地域に貢献していることを実感することができた。また、共同制作による活動を通して、生徒どうしが意見交換をしたり、お互いを認め合ったりする姿が見られた(写真18)。

平成18年度は、東郷中学校美術部員のみが制作に関わった。しかし、より多くの人に関われる活動にしたいという思いが高まり、平成19年度は、美術部員だけでなく全校生徒に呼びかけたり、町の広報誌を通して町民に広く呼びかけたりした。結果的には約30名の生徒や町民が活動に参加することができた。

現地での制作活動は夏休み期間中に行い、約10日間かけて制作した。炎天下での制作であるため日よけやテントの設営が必要である。テントや機材の準備につ

いては役場の都市計画課や建設部と協力して行った。また、壁画制作活動の開始式と完成式には、東郷町長をはじめ、教育委員会関係者や多数の保護者、学校関係者、そして地域住民が出席をした。

壁画制作活動の中で、生徒は、巨大な画面に描く際に必要な足場の組み方や墨壺を使った線の引き方などについて地元の塗装業者の方に教わり、普段の授業では学習することができない知識や技能を身につけることができた。また、壁画制作活動の様子が町の広報誌や新聞、テレビやラジオを通して広く伝わったことでその場所に集う人の数も増えた。そして何よりこの壁画制作活動を通して、生徒は自分たちの地域を改めて見つめることができ、自分たちが描いた壁画が数十年後までその場に残ることに喜びと達成感を感じることができた。

本実践では、地域住民のサポートが不可欠であった。今後は、行政機関や地域社会との関わりの中でこのような造形活動をいかに発展させていくことができるかが課題である。同じことを繰り返し行っていくだけではなく、さらに新しい展開を試みることが、子どもの地域への関心が高まり、愛郷心を育てることにつながると考えている。そして、仲間とともに力を合わせて大きな作品をつくりあげる喜びを味わい、それが自分たちの暮らす町の中に長く存在することにこの活動の大きな価値がある。「地域」という概念が薄れてい



写真14：  
壁画制作に取り組  
む生徒たち  
(平成18年度)



写真15：  
完成した壁画  
(平成18年度)



写真16：  
壁画制作に取り組  
む生徒たち  
(平成19年度)



写真17:  
完成した壁画  
(平成19年度)



写真18:  
制作段階で意見交換をする生徒たち

く現代において、このような活動が新たな地域活性化へつながると確信している。

### 3 地域と関わるものづくり教育活動の成果と今後の課題

以上、筆者らが実践してきた地域との関わりを活かした3つの実践から、次のような成果と今後の課題が挙げられる。

まず、活動の参加者にとっては、普段は体験することが難しくなってきたものづくりを体験する良い機会になり、地域の人々ともものづくりを通して関わることで、異年齢の人たちとの交流を図り、地域に残る文化財や伝統的な技術と触れ合う機会を持つという利点が挙げられる。そして、そのような機会を重ねることが、地域への愛郷心を育むきっかけになるのではないかと考えられる。次に、実践を企画する側にとっても、地域の教育活動に取り組むことで、将来教育の現場に立つ指導者やものづくり活動を行っていく研究者の指導力や教育力の育成を図ることができ、教育現場の枠にとどまらない「場」を活かした活動を展開できるという利点が挙げられる。また、地域はものづくりを通して情報を発信していく有効な場にもなると考えられる。さらに、市町村、教育委員会、企業、NPO団体など活動を依頼する側にとっては、地域の大学や学校、ものづくり教育関連団体の持つ教育力を活用でき、生涯学習センターの教育活動を安定的に運営していくことや地域活性化の一助になるという利点も含まれる。

このように、地域との関わりの中でのものづくり教育活動を実践していくことは、教育現場における場の発展や地域の活性化において、多くの可能性を与えると考えられる。そして、その質を高めていくためには、

活動に参加する「参加者」、行政などの「依頼者」、活動を企画し実践する「企画者（実践者）」の三者が有機的に関わりあい、現代の地域環境、教育環境に何が必要であるかを考えながら、活動を提案し、実施し、その活動を検討し、さらにより良い・より大きな意義のある教育活動へと展開していくことが必要であると考えられる。

## 4 おわりに

以上の考察を通して、現代の社会をより良い方向へ展開していくために、今後も地域と関わるものづくり教育活動の需要は増加すると考えられる。ここで我々が考えなくてはならないことは、このものづくり教育活動が、単なる一過性のイベントとして終わってしまうのではなく、その地域の未来を担うであろう子どもたちにとって、地域のよさを知り「大切にしていこう」「守っていこう」という郷土への思いを育むような実践のあり方を検討していくことである。そのためには、行政をはじめとする地域社会との連携を図り、各地域の特色を活かしたものづくり教育活動を提案し、継続していかなくてはならない。また、このような機会が縮小されている学校教育の現場とも連携を図りながら、地域という身近な環境を活かしたものづくり教育の提案を今後も引き続き行っていくことが必要である。筆者らが運営し実践している「ものづくり教育会議」においても、このような活動の一助となれるよう、他の会員とともに、今後も幅広い視点に基づくものづくり教育活動の在り方について考えていきたい。

## 註

- 1) 文部科学省 「文部科学省の紹介（生涯学習—教育、文化及びスポーツ活動を通じた地域教育力再生）」文部科学省ホームページ [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/soshiki2/09.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/soshiki2/09.htm)  
文部科学省では、①平成16年度より3ヵ年にわたり子どもたちが安全・安心してスポーツや文化活動など多彩な活動ができる活動拠点を確保する「地域子ども教室推進事業」、②国民一人一人が、自然に、日常的にボランティア活動を行い、相互に支え合うような地域社会の実現を目指して、地域におけるボランティア活動の全国展開を推進する「地域ボランティア活動推進事業」、③子どもから高齢者まで、地域住民の誰もが身近にスポーツに親しむことができる場となる総合型地域スポーツクラブの全国展開の推進、④子どもたちが日常の生活圏の中で、地域の特色ある様々な文化に触れ、体験するプログラムを作成し、豊かな人間性と多様な個性を育む「文化体験プログラム支援事業」などの各事業を、＜地域教育力再生プラン＞として実施している。
- 2) 文部科学省 小学校学習指導要領 第1章総則 第3(4)
- 3) 中野民夫「ワークショップ—新しい学びと創造の場—」2001 岩波新書 p.19
- 4) 前掲3) p.4
- 5) 中央教育審議会生涯学習分科会 総会 第34回 議事要旨・

配付資料 参考資料3 平成17年度文部科学省生涯学習関係予算主要事項 2005 文部科学省ホームページ

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo2/siryou/001/05091501/s003/001.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo2/siryou/001/05091501/s003/001.pdf)

- 6) 2007年度尾張津島藤まつりまちあそび報告書 「1.『信長の台所 津島まちあそび』の目的」 2007 天王文化塾ホームページ

<http://www.ne.jp/asahi/marron/hut/tenjyuku/topsaiji.html>

- 7) ものづくり教育会議 「ものづくり教育会議 年報 2006-2007」 2007

ものづくり教育会議は、ものづくり教育の実践を行いながら教育現場におけるものづくり教育の内容を研究し、ものづくり教育の提案を行っていくことを目的として2003年7月に発足した研究会である。ものづくり教育会議では、①教育現場におけるものづくり教育の現状の調査とまとめ、②教育現場におけるものづくり教育の企画の提案と実践、③教育現場におけるものづくり教育の実践の記録と保存、④ものづくり教育に関連した展覧会の開催、⑤ものづくり教育に関連した講座および講習会の開催、⑥出版、⑦会員

相互の情報交換、⑧教育の現場との交流と連携、⑨その他必要な事項という項目を達成するためにこれまでに様々な形式のものづくり教育の実践を行ってきた。

- 8) 前掲 6)

## 参考文献

- 1) 水上喜行・樋口一成 監修, 樋口一成・西村志磨・藤田雅也 ほか著, 素材>学年>時間>動詞で検索する造形教材, 愛知教育大学出版会, 2008
- 2) 河村瑞江・樋口一成 監修, 河村瑞江・樋口一成・若尾真由 ほか著, ファブリック! in life, 愛知教育大学出版会, 2006
- 3) 宮脇理監修, 新版美術科教育の基礎知識, 建帛社, 1998
- 4) 中野民夫著, ワークショップ -新しい学びと創造の場-, 岩波新書, 2001, p.19
- 5) 小原康子著, とべ! 緑の教室 武蔵野市セカンドスクールの挑戦, 小学館, 2001

(2008年9月17日受理)